



～カムパネルラとは～

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol.23 2011年7月号

- 悲しみを味わう絵本、『いつでも会える』・・・・・・・・・・原田 博之
- じゃんけんをする・・・・・・・・・・藤田 博
- 生命へのあたたかいまなざし・・・・・・・・・・平野 晶子
- 「だいじなたからもの」のありかを教えてくれるこの一冊・・・・・・・・遠藤 しおり
- 新刊紹介・・・・・・・・・・藤田 博

■ 悲しみを味わう絵本、『いつでも会える』

原田 博之

宮教大に着任する以前、私は高校で教諭をしておりましたが、週末はそれ以前からの勤務先で、心理カウンセラーの仕事に当たっておりました。その仕事を通じて出会った本が、菊田まり子さんの『いつでも会える』です。書店ではおとなのための絵本として扱われていますが、1999年度ボローニャ児童賞・特別賞を受賞した作品です。



一匹の犬と飼い主との話と聞くと、飼い主から見た犬の話を思い浮かべるかもしれませんが、この絵本の主人公は犬のシロ、幼い飼い主のみきちゃんを心から慕っているという設定になっています。前半では二人の幸せな時間が流れ、突然の場面転換を経て、ある悲しみをシロが乗り越えていく過程が描かれていきます。

カーペンターズという兄妹によるデュオ歌手をご存じでしょうか。その音楽と歌声には世界中の聴き手を魅了して止まない不思議な力があり、現在もCMなど様々な場で耳にすることができます。ヴォーカリストの妹カレンは、摂食障がいのため32歳でその短い生涯を閉じましたが、幼少期に、特に母親から無条件の愛を注がれなかった反動から症状に陥ったとの見方がありました。憂いを帯びた歌声には、満たされなかった彼女の悲しみが込められていたのでしょうか。教え子の高校生たちと《Sing》を歌った時、カレンの生涯について振り返り、『いつでも会える』を一緒に読みながら、アーティストの演奏や芸術作品を通して、自らの感情を追体験することについて語り合いました。

精神分析学者の小此木啓吾は、悲しみを悲しみとして感じられることが心の健康に必要であると、『対象喪失』で述べています。そして、芸術作品の中には芸術家たちの悲哀の心理過程が豊かに表出されている、これらの作品を通して、それぞれの悲哀を芸術家たちと共有し、その助けを借りてより意味深いものとして体験し、推敲してゆくとしています。『いつでも会える』を開く度に呼び起こされる悲哀の感情は、読み手である私たちが過去に味わった対象喪失の体験が、シロの悲しみに共鳴するために起こるものなのだと思います。

人生において思わぬ悲しみに直面することは、誰にも起こりうることです。今もし大きな悲しみに打ちひしがれているとしたら、時間の経過の中でその悲しみを乗り越え、この絵本を手にとって、大切な人や愛する対象を思い起こせるまでに快復していかれることを願います。今、大切な人と一緒に過ごしている方も、この絵本を通して、相手の方の存在の大きさを改めて思うことができるでしょう。読み終わった後に優しい気持ちになれる、そんな絵本だと思います。

※ 「いつでも会える」／菊田まり子作・絵／学習研究社

(音楽教育講座)

じゃんけんは勝ったり負けたり、一人だけ勝ちつづけることはありません。あるとすれば、よほど運がいいためと考えます。かなり重要なこともじゃんけんで決める、決めたその結果に異を唱えないのは、じゃんけんは平等との考えがあるからと言えます。三すくみの関係性の上につくり出される、じゃんけんの公平性です。

せなけいこ作・絵『じゃんけんぽん』（すずき出版）は、お日さまと雲のじゃんけんから始まります。雲の勝ち、勝った雲は、「およろこびで ゆきを ふらせました。」子どもたちとゆきだるまがじゃんけんします。ゆきだるまの勝ち、勝ったゆきだるまは、石ではなく人参の鼻をつけてもらいます。「その にんじん、ぼくの みかんと とりかえてよ」、うさぎがそう言う、「じゃんけんで かったらね」とゆきだるま。うさぎの勝ち、勝ったうさぎは人参を手に入れます。鼻がみかんになったゆきだるま、「うん、これも わるくない。」眠くないうさぎがお月さまに、「じゃんけんで かったら もっと おきて いても いい？」勝ったのはお月さま、負けたうさぎは寝ることに。お月さまとお日さまが、「じゃんけん……ぽーん！」勝ったのがどちらかは、寝ているうさぎの部屋の窓、そのカーテンの隙間から日が射していることから明らかです。この後、お日さまは雲とまたじゃんけんをするのでしょうか。したとして、勝つのはどちらでしょうか。ここにあるのは、じゃんけんが作り出すエンドレスの世界なのです。



「グー グー グーは、つよいんだい。」と言うグルリンポン、「パー パー パーは、つよいんだい。」と言うパラリンポンがにらめっこ。「うーむ、それなら、じゃんけんしょうぶだ。」じゃんけんをすれば結果は明らかです。「パラリンポンに つつまれちゃった。」そこへ「チョキ チョキ チョキは つよいんだい。」とチョロリンポンがやってきます。グーが、パーが、そしてチョキがの順になっているのは、チョキは間に入る、つなぎの役を果たすためと考えられます。パーに勝ったチョキに勝ったグー、パーに負けたグーは、「ぼくって、よわくて つよいんだね。かったり まけたり、するんだね。」「つよくて よわくて じゃんけんぽん。さんにな いっしょに じゃんけんしたら、あいこでしよったら あいこでしよ。ずっと ずっと あいこでしよ。」あさのななみ文・よねやまえいいち絵『つよくてよわいぞじゃんけんぽん』（ポプラ社）の、「つよくてよわい」じゃんけんの世界です。

むらいきくこ作・絵『じゃんけん』（岩崎書店）は、母が子どもたち三人にさせるじゃんけんです。「いっぽん のこった バナナ」「ひとつ のこった あめ」「いちまい のこった おせんべい」、母は決まってじゃんけんをさせます。残った一つを誰が取るかを決めるためなのは言うまでもありません。「ぼくは じゃんけんが よわい。おにいちゃんや いもうとに いつも まける。」と弱音を吐く「ぼく」は、兄と妹に挟まれた「ぼく」なのです。「じゃんけんを しようすると、あたまの なかで ぐうと ちょきと ぱあが けんかを はじめ」ます。きょうは「ぼくの だいすきな いちごのケーキ」、なおのことそうなのです。ちょきを出してあいこ、「いちごの ケーキが ひとまわり おおきくな」ります。またちょきを出して、「おにいちゃんに かったぞおー。」「いちごの ケーキが また おおきくな」ります。妹との勝負を前に、「ぼくは ものすごいことに きがつ」くのです。「いもうとは いつも ちょきをだすんだ！さっきだって きのうだって このまえだって……」「いちごの ケーキは どんどん ふくらんで ぼくのあたまからはみだした。」ぐうを出して「ぼく」は負けます。「いちごの ケーキは ぼくはつし ばらばらに。」三人兄妹が、「ぼく」を挟んでじゃんけんの関係になっているのがわかります。勝った妹が「ぼく」にケーキをくれます。兄が負けたのも、「ぼく」がちょきを出すのを知っていて、ぱあを出したためかもしれないのです。母がねらったのはそれだったのではないのでしょうか。「ぐうは ちょきより つよく ちょきは ぱあより つよく ぱあは ぐうより つよくて ぐうは……」、ここにあるのは、じゃんけんが作り出す横並びの関係なのです。



※ 「じゃんけんぽん」／せなけいこ作・絵／鈴木出版

※ 「つよくてよわいぞじゃんけんぽん」／あさのななみ文・よねやまえいいち絵／ポプラ社

※ 「じゃんけん」／むらいきくこ作・絵／岩崎書店

（英語教育講座）

「こだまでしょうか」
「遊ぼう」っていうと
「遊ぼう」っていう。
「ばか」っていうと
「ばか」っていう。
「もう遊ばない」っていうと
「遊ばない」っていう。
そして、あとで
さみしくなって、
「ごめんね」っていうと
「ごめんね」っていう。
こだまでしょうか、
いいえ、だれでも。



この詩はテレビの CM で取り上げられたため、多くの方がご存じではないかと思いますが、今回、私が紹介する『わたしと小鳥とすずと』は、タイトルと同じ題名の詩、「私と小鳥とすずと」や「こだまでしょうか」が掲載されている、金子みすゞの童謡集です。

私が金子みすゞを初めて知ったのは小学生6年生の時、担任の先生が暗唱してくれた「つもった雪」という詩を通してでした。当時は金子みすゞという作者名も知りませんでしたが、雪の気持ちになって書かれているその詩は、それまでに会ってきた詩とは何か違うと、小学生であった私なりに感じたものがあり、ずっと心に留めてきました。

「つもった雪」
上の雪
さむかるな。
つめたい月がさしていて。
下の雪
重かるな。
何百人ものせていて。
中の雪
さみしかろな。
空も地面もみえないで。

次の出会いは大学生になって、高校の恩師に会いに行った際、「すばらしい詩人がいる」と紹介され、その名前が金子みすゞであること、そして小学校の時に暗唱してもらって以来心に留めてきた「つもった雪」も金子みすゞの作であることを知りました。

私はさっそく、「つもった雪」が掲載されている『わたしと小鳥とすずと』を購入して読み、金子みすゞの紡ぐやさしく、清々しい詩のどれもが大好きになりました。一つ一つの作品は短く、私たちの身近にあるものが題材であり、子どもたちが普段使っているような言葉で書かれています。子どもが日々を過ごしていく中、思ったこと・感じたことをそのまま写し取っているかのようです。どの作品も簡潔で素朴なものばかりなのですが、詩を一つ読むごとに私の心には新しい世界が広がっていくように思われました。それまで何気なく生きてきた世界の新たな一面が見え、周りに息づく多くの生命に気付くことができた、そんな喜びと感動を覚えることができたのです。

この本は『金子みすゞ童謡集』となっています。童謡とあることから、子どものためのものと思われるかもしれませんが、しかし、この本に書かれた詩は、大人になっていくほど、新鮮な感動を覚えるものではないかと思います。それは、もしかすると、私たちが大人になり、常識の中でばかり物事を見るようになっていくに従って遠ざかってしまう、子どもの頃に感じていた世界の新鮮さや不思議さを金子みすゞの詩が思い出させてくれるからなのかもしれません。

私は幼稚園に勤め始めて、この童謡集を度々読み返すようになりました。子どもたちと毎日、生活をしていく中で続けたいと思っている、身近な物事に対する興味と、それらに生命を感じて愛しむ心を、金子みすゞの詩が思い出させてくれる気がするからです。金子みすゞの詩を読むたびに、沢山の生命が満ちあふれる、すばらしい世界に生きているのだという喜びを感じることができるのです。

※ 「わたしと小鳥とすずと」／金子みすゞ／JULA 出版

(附属幼稚園教諭)

■ 「だいじなたからもの」のありかを教えてくれるこの一冊

カール・ノラック文 / クロード・K・デュボワ絵 / 河村万里子訳『わたしはだいじなたからもの』（ほるぷ出版）

遠藤 しおり

期待に胸が躍る新学期、ロラは歌を歌いながら帰ります。歌うと、幸せが体中に広がるのです。できたばかりの友達のルルが、ロラに尋ねます。「ねえ ロラは、うちでは なんてよばれてるの?」「ちびちゃん とか、かわいいようせいさん とか、だいじなたからもの とか」、ロラは元気よく答えます。それを聞くと、ルルも他の子たちも「えー!」と言って笑い出したのです。



「だれだって、そととはちがう うちのよびながあるとおもうけど……。」そう考えたロラは、調べてみることにしました。「すみません、おまわりさんはこどものころ、うちで なんてよばれてましたか?」「うちのひよこちゃん さ。」パン屋さんにも尋ねます。「まんまるロールパンだったかな。」ロラは何だかほっとして、歌い出します。しかし、バス停に着くと、先ほどの友達が、「あははは、ようせいさん だってさ! やーい、ちびちゃん!」と冷やかしました。ロラはしょんぼりと、一人、歩いて帰るのです。歌も歌わず、口笛も吹かずに。

「おかえり、ちびちゃん」玄関を開けたパパがそう言っても、ロラはふくれっ面。パパとママは心配そうに尋ねます。「いったいどうしたの、うちのだいじなたからもの?」「それよ、それは わたしのこと!」ロラは、パパとママの腕の中に飛び込みました。

翌朝、学校に向かうとき、ルルがロラのところへやってきます。「きのうはごめんね。ほんとはうらやましかったの。うちではだれも、あんなにかわいいよびかたはしてくれないから。」ルルはロラに、「ちびちゃん とか、ようせいさん とか、だいじなたからもの とか」と呼んでもらうようにしたことを教えます。「それはだめ! そのよびかたは わたしの、わたしだけの!」そう言ったロラは気がつくのです、「どこのこもいえでは だいじなたからもの」であることを。「ねえ ルル、うたをうたうと、とってもたのしくなるって しってる?」二人は一緒に歌を歌います。幸せな気持ちが、体いっぱい広がります。

天真爛漫で前向きのロラ、そのロラを大切に思う人たちが支えています。誰にも大切に思ってくれている人がいます。思う人にとって、ひとりひとりが「うちのだいじなたからもの」なのです。日々の暮らしに追われ、忘れてしまいがちですが、ときには立ち止まって、支えてくれる両親や友人、大切な人に感謝の気持ちを伝えてみたくになります。幸せな気持ちが胸いっぱいに広がり、思わず歌いたくなるのです。

(教育学コース4年)

■ 新刊紹介

あべ弘士『しろもくろも、みんなおいで』（童心社）

白と黒は対極にある、従って、対立する色と言えるでしょうか。結婚式と葬式、それぞれにあつての白服と黒服を考えれば、対極ではあっても対立でないことがわかります。二つは非日常の時間枠を共有しているからです。白と黒を対立ととらえてしまうのは、二つに分け、それぞれに善と悪の色をつける、色眼鏡によって見てしまうからと言えます。実は、二つは背中合わせでつながっている同じ仲間、大変な仲良しかもしれないのです。とすれば、「白か黒か」ではない、「白も黒も」になって当然、まさしく「しろもくろも、みんなおいで」なのです。

シロアジサシやシロハヤブサ、シロカモメなど白い鳥がいます。クロアジサシやクロウタドリ、クロミツバメなど黒い鳥がいます。同じ種でも白いものと黒いものがあります。ホッキョクグマとアメリカクロクマ、ダイサギとクロサギのようにです。体全体が白で一部が黒、またはその逆、白黒模様のもものもいます。ユキヒョウやワオキツネザル、シマウマのようにです。北極と南極、二つの極が性格において一つのように、「北の海のとりたちも、みんなしろとくろ。南の海のペンギンも、みんなしろとくろ」です。ウミガラスやツノメドリは北極、アデリーペンギンやマゼランペンギンは南極です。季節によって白から黒に、黒から白に色を変えるものもいます。オコジョやノウサギ、ライチョウなどです。

「しろいとり くろいとり みんなおいで!」「しろとくろの もようたち みんなあつまれ!」ここにあるのは、白と黒の対立の世界とは対極の、白と黒とが融和した世界なのです。「しろとくろが なかよくあそんでる。」「しろとくろが わらってる。」

マリー・ホール・エッツの『あるあさ、ぼくは……』（ぺんぎん社）、『もりのなか』（福音館書店）はいずれも白と黒、モノトーンの世界です。『あるあさ、ぼくは……』では、男の子はオンドリやブタ、ウサギの真似をします。『もりのなか』では、男の子を先頭に、ライオンやゾウ、クマがー列になって行進します。人間と動物の距離が限りなくゼロの世界、それを描くための白と黒なのです。

(藤田 博)

発行：宮城教育大学附属図書館

